

楽曲紹介

解説=永井玉藻

フランスの音楽史において、19世紀後半から20世紀前半にかけては、名を残す「大作曲家」に恵まれた時期である。特に、ガブリエル・フォーレ(1845-1924)、クロード・ドビュッシー(1862-1918)、そしてモーリス・ラヴェル(1875-1937)の3人はひとときわ抜きん出た存在だろう。しかし、一言に「フランスを代表する作曲家たち」といっても、その人生は三者三様の「ドラマティックでダイナミック」な側面を持つ。

王道のパリ音楽院出身ではなく、また成功の証とされていた歌劇作品のヒットに恵まれなかったにも関わらず、パリ音楽院の院長に上り詰めたフォーレ。当初はピアニストを目指したが挫折して作曲に転向し、波乱に満ちた生涯を送ったドビュッシー。フォーレの指導で作曲の腕を磨き、早くから公の場で活躍するものの、アカデミックな成功はつかめず、病気にも苦しんだラヴェル。激動の世紀転換期と第一次世界大戦をも経験した彼らの代表作が並ぶ今月のプログラムでは、フランス音楽の「ドラマティックでダイナミック」な側面を堪能できるだろう。

フォーレ

組曲『ペレアスとメリザンド』Op. 80

ベルギーの詩人・劇作家のモーリス・メーテルランク(1862-1949)が1892年に発表した戯曲『ペレアスとメリザンド』は、同世代の作曲家に多くのインスピレーションを与えた。フォーレによる同名の作品もその一つで、もとは劇付随音楽として作曲されたもの。その後、まず3曲からなるオーケストラ組曲版が発表され、さらに「シシリエンヌ」と「メリザンドの歌」の2曲が加えられた。ただし、「メリザンドの歌」は声楽付きのため、今日では管弦楽のみの4曲構成で演奏される機会も多い。

当初は別の作品のための楽曲だった「シシリエンヌ」を除き、各曲は「前奏曲」の冒頭で第1ヴァイオリンが奏する主題と関連を持って展開する。「前奏曲」終結部分で角笛を思わせるように登場するホルン・ソロ、「糸を紡ぐ女」の糸車がぐるぐると回る様子になぞらえた弦楽器の動きなど、音による情景描写も興味深い。最後の「メリザンドの死」では葬送の付点リズムが刻まれ、上行するフルート・ソロによって曲は静かに締め括られる。

【作曲年代】1898年 【初演(劇付随音楽)】1898年6月21日、ロンドン、プリンス・オブ・ウェールズ劇場にて、作曲家自身の指揮による 【初演(4楽章の組曲)】1912年12月1日、アンドレ・メサジェ指揮/パリ音楽院管弦楽団による

【楽器編成】フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、ハープ、弦楽5部

ラヴェル 『ダフニスとクロエ』第2組曲

20世紀前半にフランスで活躍した作曲家たちにとって、ロシア人興行主のセルゲイ・ディアギレフ(1872-1929)と彼が率いた「バレエ・リュス」は、極めて重要な存在である。ラヴェルの場合、『ダフニスとクロエ』と『ラ・ヴァルス』の2曲が、バレエ・リュスおよびディアギレフとの関わりの中で生まれた作品。ただし、バレエとしてはどちらも華々しい成功作とはなっていない。『ダフニスとクロエ』の場合、その初演の直前にバレエ・リュスが上演した『牧神の午後』が話題を全てさらっていったために、影の薄い存在になってしまったのだった。

翌年、作曲家はバレエの第3場で奏される「夜明け」以降の音楽を、「交響的断片第2シリーズ」(いわゆる「第2組曲」)として出版する。初演以降も不運に見舞われ、忘れられていったバレエ版とは異なり、この「第2組曲」は、今日でもラヴェルの代表作として演奏される機会が多い。バレエの題材となった古代ギリシャの物語を想起させるように、多彩な打楽器、フルート群、ハープの活躍に聞きどころの多い作品である。

【作曲年代】1909～1912年 【初演】1912年6月8日 パリ、シャトレ劇場にて、ピエール・

モントゥーの指揮による(バレエ初演)

[楽器編成] ピッコロ、フルート2(2番はピッコロ持ち替え)、アルト・フルート、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、E♭クラリネット、バス・クラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン4、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(タンブリン、小太鼓、ミリタリードラム、太太鼓、カスタネット、トライアングル、シンバル、グロッケンシュピール)、ハープ2、チェレスタ、弦楽5部

ドビュッシー

交響詩『海』—管弦楽のための3つの交響的素描

今月の定期で取り上げられる作曲家3名のうち、20世紀の音楽語法に特に強い影響を与えたのはドビュッシーだろう。西洋音楽においては、長いあいだ機能と和声に基づく明確な調性感やリズムの周期性が重視されていたが、ドビュッシーは1890年代から、こうした要素を薄めていく。結果として、それは作曲家独自の音の響きを構成し、彼の代表作とされる楽曲もこの頃から生まれていった。

『海』も、作曲家がその独自性を管弦楽で発揮した作品の一つ。弦楽器を多分割し、奏法を混在させた状態で演奏させたり、半音階の多用や機能と和声法上の役割を無視して和音を使ったりすることは、当時のアカデミックな音楽のあり方から離れた響きを生む。しかし、そのいわば異質な響きがドビュッシーの「らしさ」であり、かつ、この作品の魅力であろう。

第1楽章「海の夜明けから真昼まで」 チェロの弱音と、ヴィオラによる5音階ののち、イングリッシュ・ホルンとトランペットの主題が聞かれる。この主題を用いた主部の前半、ホルンと4分割されたチェロが導く主部の後半を経て、楽章冒頭に登場した素材が繰り返され、華々しく終わる。

第2楽章「波の戯れ」 全体を通して、グロッケンシュピールとハープ、弦楽器の繊細な動きが中心となり、狭い音域で上下行する管楽器の旋律を支える。

第3楽章「風と海との対話」 唸るような低弦楽器で始まる。これまでに登場した主題や、それらから引き出された素材が循環し、次々に曲想を変化させ、フィナーレへ突入する。

【作曲年代】1903～1905年 【初演】1905年10月15日パリにて

【楽器編成】ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、ホルネット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、トライアングル、シンバル、タムタム、グロッケンシュピール）、ハープ2、弦楽5部

ラヴェル

管弦楽のための舞踏詩『ラ・ヴァルス』

第一次世界大戦中の1917年、ラヴェルは最愛の母親を亡くしたショックから、極度の創作不振に陥った。彼が作曲への意欲を取り戻すまでには2年を要したが、その間には健康まで害してしまっている。復活のきっかけとなったのは、ディアギレフによる新作バレエ音楽の委嘱だった。完成した曲の2台ピアノ版を聴いたディアギレフは、作品を「バレエ曲のポートレート、バレエ曲の絵」と酷評し、舞踊作品としての上演はなされなかったが、管弦楽版としての初演が行われて以来、楽曲は今日でも広く親しまれている。

作品は連続して奏される序奏と7つのワルツ、そしてそれらを再現する8つ目のワルツで構成されている。コントラバスの静かな低音とファゴットのソロで始まる一連のワルツは、ヨハン・シュトラウスのウィンナ・ワルツを彷彿とさせつつ、各楽器を巧みに使ったソロを織り込んでいる。曲が進むにつれてワルツの喧騒は大きくなり、頂点を迎えると突如、音楽が断ち切られて終わる。

【作曲年代】1919～1920年 【初演(バレエ)】1926年、アントワープ、ロイヤル・フランダース・バレエ団による

【楽器編成】フルート3(3番はピッコロ持ち替え)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バス・クラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(タンブリン、小太鼓、大太鼓、トライアングル、シンバル、クロタル、タムタム、カスタネット、グロッケンシュピール)、ハープ2、弦楽5部

ながいたまも／パリ第4大学博士課程修了、博士(音楽学)。専門は西洋音楽史(特に19～20世紀のフランス音楽、バレエ)。現在、慶應義塾大学、白百合女子大学、桐朋学園大学、武蔵野音楽大学にて非常勤講師を務めている。また、Webメディア「バレエチャンネル」での連載「【マニアックすぎる】パリ・オペラ座ヒストリー」をはじめ、曲目解説やコラム寄稿などの各種執筆も行なっている。